

古浄瑠璃ことわざ

—「古浄瑠璃正本集」を主として—

古 保 勲

一、はじめに

古浄瑠璃について一般的には、新潮日本文学小辞典の解説「浄瑠璃はおよそ一五世紀室町時代の中ごろに扇拍子で語り初められた。当初の内容は源氏の御曹司牛若丸と三河国矢矧宿の長者の娘浄瑠璃御前とのほかない恋物語であった。その語りがその娘の名によって浄瑠璃と呼ばれたが、やがて種々の物語を同じ曲節で語るようになって、語り物の種類の名称になった。(中略)上演形式はわが国最初の多幕劇形式で、はじめ浄瑠璃御前の物語は一二段に区切って演ぜられたらしいが、その後の作品は六段、つまり六幕物が普通であった。詞章は、小説ふうの文体に七五調をまじえた叙事文学の形態をしているが、筋の運び方に舞台で演出できるような工夫が加えられていて、劇文学の新しい様式が成立した。内容は平易な詞章で世相を反映したテーマを展開し、貴賤上下おしなべて共感できる大衆演劇として成長していった。(中略)延宝・天和期(一六七三—一八三三)には、京都の宇治加賀掾が古典趣味の優雅な流風を起したが、このころまでは戯曲構造も語り方演じ方も文学性も未成熟なので、古浄瑠璃と称する」(角田一郎)が当を得ている。

浄瑠璃劇に並行して説教劇もあった。

古浄瑠璃や説教の内容および叙述は全く平面的であって、立体的であらねばならぬ戯曲の定義からは、およそ距離の遠いものであった。もちろん新作物は次から次へと興行されたもので、今日

に伝存している古浄瑠璃の正本の数は数百曲にも上るであろうが、その大部分は本地物かお家物か金平物かが占めている。

二 古浄瑠璃のテキストおよびことわざの基準について

テキストとしては

「古浄瑠璃正本集」第一、第五 横山重編(角川書店)を使用した。

「金平浄瑠璃正本集(全三巻)」室木弥太郎編については、「説

教正本集」(全三巻)横山重編とあわせて別の機会に調査したいと思っている。

なお「古浄瑠璃正本集」の例言の中において、「古浄瑠璃という名

称は、かなり漠然とした称呼のやうであるが、私どもは一応、上方では近松の『出世景清』を界として、それ以前の正本を採り、江戸では享保期の絵入の正本までといふことにした」と定義づけている。

「古浄瑠璃正本集」からことわざを抜き出すにあたっては、

「——のごとし」「——という事がある」「——と申す」「——と

かや」「——ならひ」「げに——とは」「——と聞時は」「——ぞ

かし」という表現を目安としてことわざを収録した。

これらのことわざをことわざ集で確かめるために

毛吹草 松江重頼選 正保二年刊(岩波文庫)

世話尺 僧 空願編 明暦二年刊(更生閣書店)

譬喻尺 松葉軒東井編 天明六年刊(国語学資料第10輯)

諺 苑 太田全斎稿 寛政九年刊(新生社)

を使用した。

記載に当たっては、ことわざ集の略号 △毛吹草Ⅱ毛 世話尺Ⅱ世
譬喻尺Ⅱ譬 諺苑Ⅱ諺Ⅱ を用いた。

三 「古浄瑠璃正本集」のことわざの特色

一般的にみられる特色について

(1) 教訓のことわざが多い。それはことわざによって、生活の知恵を
教えようという意図があることから使用された。「古浄瑠璃正本集」
では41例を数える。

(2) 古浄瑠璃の中に本地物（釈迦や阿弥陀や菩薩の前世）が多いので
神仏に関することわざが多いのも当然の結果といえる。

一じゆのかけ、一がのながれ、みな是たしやうのえん（浄瑠璃十
二段）

かみも五すいさんねつのくるしみ（しんらんき）

神はしやうじきのかうべにやとり給へ（一切記）

(3) 時代の精神とも結びつくが、主従、師弟、親子といった身分の上
下関係を大事にすることわざが多くみられる。

おやこは一世（ゆみつき）

しう々々は三世のゑん（大友のまとり）

弟子七しやくさつてしのかげをふまず（酒典童子若壮）

(4) 中国の故事成語との関係の深いものが多い。四字成句のものはこ
とわざの周辺のものと考えたい。

えしやでうり（しんらんき）は、あふ物にわかれあり（小袖そが）
に含める。

きんくわ一日のかけをまつ（待賢門平氏合戦）

(5) 合戦記が含まれているので相手を攻撃することわざを見受ける。

とうろうがおの（松浦合戦）

「古浄瑠璃正本集」にみられることわざを機能別に大藤時彦氏の分
類に従って総数96をあげよう。^{注2}

『攻撃のことわざ』——人間の愚劣弱点をあげることわざ。合戦
記に用例がある。

1ぐにんなつのむしとにでひに入る（あたかたち）（大友のまとり）

（なすのゝいこん）（なすの興一竹生嶋参）（たけたものかた

り）（日本大王）（大日本神道秘密の巻）（あつた大明神の御本地）

同（毛）（世）（諺）

相手を制圧し愚弄するために用いられた。

2とうろうがおの（松浦合戦）（常陸坊かいぞん）（大友のま

り）（八まん太郎琴之縁）（東鑑平鬼王丸）（大日本神道秘密の

巻）（誓願寺本地）（二しんかうちざうのほんち）

分不相の戦いを戒しむために使われた。

3ぼうじやくぶじん（あたかたち）（秀平三代記二日目）（にたん

の四郎）（にしきど合戦）（よこそねの平太郎）（ちんせいノ八郎）

『あたかたち』では「ぼうじやくぶじんのやつめには」とある。

『経験のことわざ』——処生訓として伝えられたもの。長年の経験
の伝達のために用いられる。

4いしんでんしん（くわてき船軍）

以心傳心（譬）

5いのちをまたうもつかめは、ほうらいさんにあふ（はらた）（義

氏) (二) しんかうぢぎうのほんち)

命をまたう持亀はほうらいにあふ (毛)

命ヲ全持亀へ蓬萊ニ逢 (譬)

6 ういむじやうのならい (たかたち) (ともなか) (あたかたち)

(たむら)

7 うつればかはる世のならひ (あくち判官) (義経記初巻) (多田

満中)

有為転変の世の中 (譬)

ウツレハカワル (諺)

8 えんにつるるものなれば (きしほじん十らせつ女のゆらひ)

えんにつるれば唐のものをくふ (毛)

縁につれて唐の物くふ (世)

9 歌人は行すしてめい所を知 (しんらんき)

歌人はゐながらめいしよをしる (毛) (譬) (諺)

10 かにには、かうにふせてあなをほる (大友のまとり)

かににはかうにせてあなをほる (毛) (世) (譬) (諺)

本文はこのあと「よくこそいひつたえたれ」と続いている。

11 かみすむ時はしたもにこらす (はらた) (わだざかもり)

かみをまなふしも (毛) (世) (譬) (諺)

12 かめは万こうをへぬれば仏になる (小袖そが)

13 げんざいのくわをもつてみらいをしる (咸陽宮) (多田満中)

(天じんぼさつ)

14 こほりはれよりしやうすれ共、水よりこほりはひやゝか也 (待賢

院平氏合戦)

氷はみづよりいでゝみづよりさむし (毛)

14 すましきものはみや使 (多田満中) せましき物はみやつかひ (よ

ろひがえ) つかへし物はみやづかい (中将姫之御本地)

15 すめはひなにもみやこ有 (大日本神道秘密之巻)

すめばみやこ (世) (譬) (諺)

16 はなに三しゆんのやくあり (大日本神道秘之巻)

同 (毛) (世) (諺)

17 るいを以あつまる (後醍醐天皇) (にたんの四郎)

類に寄つて集まる (譬) 類ヲ以集ル (諺)

『教訓のことわざ』—先人の知恵として伝承性のあるもの。実生活の

知恵をあらわすことわざが教訓性を帯びたものに変化している。

18 あくにつよきものかななすせんにもつよきもの (酒典童子若壯)

(一切記) (よこそねの平太郎) (ちんせいの八郎)

あくにつよければせんにもつよし (毛)

悪につよきものは善につよひ (世)

悪に強ければ善にも強ひもの (譬) (諺)

このことわざは「よこそねの平太郎」では冒頭の部分で用い

られ、全体の主題を短句で、しかも日常的な慣用語で表現し

ている。

19 あなたをいわへはこなたのうらみ (わだざかもり)

あなたをいはへはこなたのうらみ (毛)

アナタヲイヘハコナタノ怨 (諺)

20 あふ物にわかれあり (小袖そが)

『参考』えしやでうり (しんらんき) (みはら物語) (しのたづ

ま) (多田満中) (勝尾寺御本地) (二) しんかうぢぎうは

さつ)

あふはわかれ (毛) (諺)

21 一しゆのかけ、一がのながれ、みな是たしやうのゑん (浄瑠璃十

二段) (清水の本地) (鍛さんだん) (一心二かびやく道) (宇佐八まんのゆらい)

一夜のやどもたしやうのゑん (大友のまとり) (くわばら女之助兄弟かたき打)

22 おとこはもんを出れば七人のかたき有 (勝尾寺御本地)

男は鬨踏出すと七人の敵あり (譬)

本文中ではこじんのことばとして用いられている。「さればこじんのことばにも……」と続く。

23 おやこは一世 (ゆみつき) (にたんの四郎) (よろひがえ) (三浦北條軍法くらべ) (一心二かびやく道) (東鑑平鬼王丸) (かげ正しいかづちもんだう)

おや子は一世しは三ぜ (毛)

24 かつてかぶとのおゝしめよ (今川物語) (三浦北條軍法くらべ) (多田満中)

かちてかふとのをゝしめよ (毛)

勝て甲の緒をしむる (世) 勝つて兜の緒をやる (譬) 勝テ胃ノ緒ヲシメロ (諺)

25 かべにみゝ、いはにくち (後醍醐天皇) (きりがね) (東鑑平鬼王丸) (十界図) 同 (毛) (世) (譬) (諺)

このことわざにつづく文として「一とこじんのつたへしごとく」とある。

26 神はしやうじきのかうへにやとり給へ (一切記)

神は正直のかうべに宿る (世) (譬) (諺)

27 かみも五すいさんねつのくるしみ (しんらんき)

28 きじんにおうどなし (かしま御本地)

同 (毛) (世) (譬) (諺)

29 君々たらすといふ共。しん々たるべし (今川物語) (頼朝三代記) (仙人龍王威勢諺) (かけ正しいかづちもんだう) 君は舟臣は水 (毛) (諺)

君は舟臣は水 (毛) (諺)

30 兄弟と成事は七しやくのきゑん (くわばら女之助兄弟かたき打) 31 きりんはつつのくに有て、千りをとふといへ共、をいぬればどばにもをとれり (咸陽宮)

32 くさづとくに国かたぶきたからは其身のたすけ (ゆいせき諺) くさづとにくにかたふく (毛) (世) (諺)

末尾の部分に用いられ、全文のしめくくりのことわざになっ

ている。

33 けふは人のうへ、あすは我身のうへ (なすの与一竹生嶋詣) (わ

ださかもり)

けふは人のみのうへ、あすはわが身のうへ (毛) (世) (諺)

34 けんじんじんくんにつかへす (あかし) (とうだいき) (わださかもり)

同 (毛) (世) (諺)

35 こきやうほうじがたき (勝尾寺御本地)

同 (毛) (世) (譬) (諺)

36 子はさんかひのくひかせ (聖徳太子のゆらい)

同 (毛) (世) (諺)

37 子ゆへのやみにまよはる (源氏のゆらひ) (東鑑平鬼王丸) (かけ正しいかづちもんだう) (普願寺本地) (二しんかうちぎょうのぼさつ)

子ゆへのやみにまよふ (毛) (世) (譬) (諺)

38 しう々々は三世のゑん(大友のまとり)

主従は三世の契(譬)

39 正ぢきはかうべにやとり(にちれんき)(にたんの四郎)

正直ノ頭ニ神ヤドル(諺)

40 しやくぜんの家にはよけい有(頼朝三代記)

同(毛)(世)(譬)

41 すんぜんしやくま(頼朝三代記)(きしばじん十らせつ女のゆら

わ)

同(世)(譬)(諺)

42 せんだんは二ばよりかんばし(ふじのまきがり)(三浦北條軍法

くらべ)(頼朝三代記)

同(毛)(世)(譬)(諺)

43 たせいにぶせい(松浦合戦)(なすのゝいこん)(みはら物語)

(たけたものかたり)(かけ正しいかつちもんだう)

同(毛)多勢に無勢は不叶(譬)多勢ニ無勢カナハヌ(諺)

合戦に敗れた原因に使う。

44 ちひは上よりくだる(ふきあげひてひら)(ふじのまきがり)

同(毛)(世)

45 ていちよはりやうふにまみへす(劔さんだん)(わだざかもり)

同(毛)(世)(譬)(諺)

46 弟子七しやくさつてしのかげをふまず(酒典童子若壯)

同(世)(譬)

47 なさげにへたてはなきもの(浄瑠璃十二段)

48 なさげは人のためならず(浄瑠璃十二段)

同(世)(譬)(諺)

49 な□の子をなすとも女に心をゆるすな(かげきよ)

七の子はなすとも女に心ゆるすな(毛)(世)(譬)(諺)

50 人は一代名は末代(誓願寺本地)

同(毛)(譬)(諺)

51 ひん女が一同、長者のまんどろにもまさる(大友のまとり)

同(世)

52 ふうふは二世(一心二かびやく道)(小倉百人一首)(あつた大

明神の御本地)(誓願寺本地)(くずは道心)

ふうふは二世のちぎり(毛)(譬)

夫婦ハ二世師ハ三世親子ハ一世(諺)

53 ゆだんもとよりたいてき(八まん太郎琴之縁)

油断大敵(譬)(諺)

54 らうせうふじやうのならひ(小袖そか)(比翼連枝)(一心二か

びやく道)

老少不定の習(世)(諺)

らうせうふじやうのよの中(箱根山合戦)

老少不定の世の中(譬)

55 らうやく口にかく。きんげん、みゝにさからふ(今川物語)

らうやく口ににがし(毛)(世)(諺)

56 両ゆふはかならずあらそふならひ(頼朝三代記)(かしま本地)

このことわざは「頼朝三代記」で冒頭の部分に用いられ、話の

主題を示している。

57 んぐはたちまちむくうて(かげきよ)

ゐんぐはは車のわのごとし(毛)

因果は輪る車の如し(譬)

58 ゑんはくちせぬならひ(むらまつ)

『遊戯のことわざ』——比喩として用いられているもの

59 あくじは千りをかくる (清水の本地) (咸陽宮) (よこぞねの平太郎) (ちんせいノ八郎)

かうじもんをいすあくじ千里をはしる (毛) 悪事千里 (世) 悪事走千里 (譬) 悪事千里 (諺)

62 一をきいて十をさとるがごとし (あまくさ物がたり) (ほうねんき) (しのだづまりぎつね) (多田満中) (善だう記)

一を聴ひて十を識る (譬)

一カラ十マテ (諺)

63 いちを以ばんをしる (くわばら女之助兄弟かたき打)

一をもちて万をしれ (毛)

64 二日の多いぐわにちとせをのぶる (今川物語) (三浦北条軍法くわへ)

一を打て盤をしる (世) 一ヲ打テ萬ヲ知レ (諺)

65 一寸の虫に五ぶの玉しる (かしまの御本地)

同 (毛) (世) (譬) (諺)

66 いぬもほうばい高もほうばい (箱根山合戦)

同 (世) (譬) (諺)

67 いんくわはくるまのわのごとく (たかたち) (あくちの判官)

同 (毛) (譬) (諺)

68 うんはてんにあり (みはら物語)

同 (世) (譬) (諺)

69 おつとの心とかわの女は一夜にかはる (ふきあげ)

おとこの心と川の女は一やにかはる (毛)

70 鬼の目にも泪 (義氏) (酒典童子若社)

同 (毛) (世) (譬) (諺)

71 風のまへのともしび (にしきど合戦) (どんらんき) (かけ正しい)

かつちもんだう)

同 (世) (諺)

72 きのふはけふの昔 (正八幡の御本地)

きのふはけふのむかし (毛) (譬)

73 君が一じつのおんにせうが百年のみをうしなふ (今川物がたり)

74 きんくわ一日のかけをまつ (待賢門平氏合戦)

檀花一日の栄 (世) (譬) (諺)

75 たのみすくなき事の例として上げています。

76 くはういんやのごとく (義経記初巻)

同 (毛) (譬) (諺)

77 くはんがくいんのすゝめはもふきうをさへつり (あたかたち)

同 (毛) (世) (譬)

78 けをふひてきずをもとむる (ちんせいノ八郎ためもと)

同 (世) 毛を吹ひて課代の疵を求む (譬)

79 こひは七しゆ (くわてき船軍) (八まん太郎琴之縁)

79 三がいはくわたくの家なをし命はせきくわのごとし (くずは道心)

80 ししんちうの虫 (頼朝三代記)

同 (譬) (諺)

81 しゆにまじはれはれはともちがはれ (ゆみつき)

朱にまじはれはあかくなる (毛) (世) 朱に接れば赤なる

(譬) 朱ニ雜レハ赤クナル (諺)

82 しんゑんにのぞんではくびやうをふむ (待賢門平氏合戦) (くわ

ばら女之助兄弟かたき打) (常陸坊かいぞん) (大友のまとり)

(わだぎかもり)

83 小をすてて火をたすく (たけたものかたり)

小虫をころして火の虫をいかす(世)(譬)(諺)

84 ちりもははじめずきまものこらぬ花ざかり(三浦北條軍法くらべ)

咲も残らず散も初めず桜花(譬)

85 つるきのやいははやき(浄瑠璃十二段)

86 ねがふ所のさいわい(源氏のゆらひ)(田村)(常陸坊かいそ

ん)(きりがね)(ぜんじそが)(今川物語)

願ふにぶに(世)願フニ幸(諺)

87 ひちやうふところに入時りやうし是をとらず(誓願寺本地)

88 みづのうへのあは(天じんばさつ)

水の泡となつた(譬)

89 めくらへびにおじず(仙人龍王威勢詩)

同(毛)(世)(譬)(諺)

90 もふきのふばく(大日本神道秘密の巻)

同(毛)(世)

91 門前に市をなし(あくち判官)(こ大ぶ)(しんらんき)(一切

記)(今川物語)(浄土さんたん記)

同(毛)(世)(譬)(諺)

92 やけのゝきゝす(とうだいき)(みはら物語)

焼野の雉子夜の鶴(譬)(諺)

93 夢は五さうのわざ(くずは道心)

夢は五臓の煩ひ(譬)(諺)

94 らうてうのくもをこい(ふじのまきがり)

同(毛)(譬)(諺)

95 りんげんあせのことし(はなや)(しんらんき)(はらた)(成

陽宮)(よこせねの平太郎)(一心二かびやく道)(誓願寺本

地)(七夕之本地)

同(毛)(世)(譬)(諺)

96 んかうか月をのぞむ(東鑑平鬼王丸)

猿猴が月に愛をなし(毛)(世)

四 謡曲と古浄瑠璃のことわざの共通点

謡曲と古浄瑠璃の關係について、若月保治氏は、「古浄瑠璃の研究」第一卷(桜井書店)の中で次のように解説されている。

「謡曲と古浄瑠璃との關係は、舞曲やお伽草子などとの關係の如く明晰ではない。いな必ずしも古浄瑠璃とのみはいはす、竹本座創立以後の新浄瑠璃とも密接な關係を保ちながら、舞曲の詞章を殆んど其儘借りたとか、お伽草子を改作して浄瑠璃に脚色したといふやうな、直ちにその正体を暴露するやうなものも殆んどない。大体の筋を借るとか、部分的に詞章や挿話を利用するとか、或は舞曲を通じて、影響するとかいった程度のもが多いやうである。例へば比期の曲にしても謡曲の『安宅』が『高館』に『八鳥』が『八しま』に『頼政』が『鶴』が『頼政』に『七騎落』が『石橋山七騎落』に『生田教盛』が『こあつもり』の後半に『生贄』が『いけにえ』に題材を提供し『夜討曾我』や『小袖曾我』などが同名の舞曲を通して、比期の浄瑠璃として語られてゐるが如きである。其他『小篠』における身替の如きは、舞曲の『満中』謡曲の『仲光』に其想をとつてゐることは明かである。けれども『ともなか』の如きが、謡曲の『朝長』と同一人物を扱つてゐながら(下巻が散失して不明であるが)謡曲とは關係がないやうに思はれる。かくして比時代の浄瑠璃も、謡曲に題材をかり、詞章をとり、其内容を利用したりしながら、舞曲やお伽草子ほど、直接に之を利用し、謡曲をその儘、浄瑠璃に語るといふことをしなかつたのは、謡曲の長さが短く、謡曲は舞曲と異つて、当時もなほ広く盛に行はれてゐたので、之と比較されること

の損があったり、浄瑠璃に語っても、珍らしく思はれなかったによるといふやうな、色々な点もあったであらうが、当時の浄瑠璃其物が、まだ謡曲ほどに戯曲化されて居なかつたので、謡曲を操劇として其儘上演し得るほどに進んでゐなかつたということも考へてよからうと思ふ」

解説によると謡曲と古浄瑠璃についてあまり密接であるとは言えない。しかしことわざに関しては共通するものが三十数例みられるので次にあげたい。

共通することわざについては、神仏に関するもの、身分の上下関係、親子の間に関するものが比較的多いので、これらは中世のことわざの一般的特色と考えてもよいのではないだろうか。

ことわざは謡曲(曲名、テキスト略号)光悦||光悦本、謡曲百番、大観||謡曲大観)、「古浄瑠璃正本集」の順にあげる。

○あふは別成へし(班女 光悦)

あふ物にわかれあり(小袖そが)

○一樹の陰や一河の水みな是他生の縁(千手 光悦)

同(浄瑠璃十二段)

○因果は車輪のめくるかここく(鉄輪 光悦)

いんくわはくるまのわのここく(たかたち)

○親子は一世のなか(熊野 光悦)

同(ゆみつき)

○かみすむときはしももにこらぬ(養老 光悦)

かみすむ時はしたもにこらす(はらた)

○神ならで三熱の苦しみ(葛城 大観)

かみも五すいさんねつのくるしみ(しんらんき)

○神は正直のかうへにやとりたまふ(吉野静 光悦)

同(一切記)

○鬼神に横道なし(鐘馗 光悦)

同(かしま御本地)

○昨日の花はけふのゆめ(養上 光悦)

きのふはけふの昔(正八幡之御本地)

○麒麟も老いぬれば驚馬に劣る(景清 大観)

きりんはつのくにに有て、千りをとふといへ共、をいぬればとば

にもをとれり(咸陽宮)

○槿花一日の栄(千手 光悦)

きんくわ一日のかけをまつ(待賢門平氏合戦)

○愚人夏のむしの火をけさんと飛入て(程政 光悦)

ぐにんなつのむしとんでひに入(あたかたち)

○現存の果を見て過去未来をしる(安宅 光悦)

げんざいのくわをもつてみらいをしる(咸陽宮)

○賢人二君に仕へず(錦戸 大観)

同(あかし)

○氷は水より出て水よりさむく(檢垣 光悦)

こほりは水よりしやうすれ共、水よりこほりはひやゝか也(待賢

門平氏合戦)

○子ゆへにまよふ親の身(三井寺 光悦)

子ゆへのやみにまよはるる(源氏のゆらひ)

○三世の機縁(橋弁慶 大観)

しうしうは三世のゑん(大友のまとり)

○正直のかうへにやとり給ふ(清経 光悦)

正じきはかうべにやとり(にちれんき)

○積善の餘慶(松虫 光悦)

しやくぜんの家にはよけい有(頼朝三代記)

○住めば宿(百萬 大観)

すめばひなにもみやこ有(大日本神道秘密の巻)

○梅檀は二葉より香ばし(蟬丸 大観)

せんだんは二ばよりかんばし(ふじのまきがり)

○多勢に無勢(朝長 大観)

同(なすのゝいこん)

○慈悲は上より下り(藤栄 大観)

ぢひは上よりくだる(ふきあげひてひら)

○貞女両夫に見えず(錦戸 大観)

ていちよはりやうふにまみへす(銀さんだん)

○蟪蛄が斧(善界 光悦)

同(大友のまとり)

○情は人のためならず(葵上 光悦)

同(浄瑠璃十二段)

○花に三春の約あり(鞍馬天狗 大観)

同(大日本神道秘密の巻)

○身は一代名は末代(元服曾我 大観)

人は一代名は末代(誓願寺本地)

○盲龜の浮木(実盛 光悦)

同(大日本神道秘密の巻)

○やけ野の雉子よるの鶴(唐船 光悦)

やけのゝきゝすのかいのうしもを思ふ(とうだいき)

○籠鳥は雲をこひ帰雁は友を忍ぶ(桧垣 光悦)

らうてうのくもをこい(ふじのまきがり)

○良薬口に苦く忠言耳に逆ふ(楠露 大観)

同(今川物語)

○論言出でてかへらねば(蟬丸 大観)

りんけんあせのことし(はらた)

○猿猴が月にあひをなし(善界 光悦)

ゑんかうか月をのぞむ(東鑑平鬼王丸)

(注1) 新版日本文学史 近世I 一二四ページ(至文堂)

(注2) 世界大百科事典(平凡社) 国語学辞典(東京堂) 「ことわざ」(大藤時彦氏解説)

(松陵工業高等学校教諭)

追記

この拙い論文について昭和四十七年度石川県教職員奨励研究の助成を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。